京都、出雲と日文研の思い出

リチャード・トランス

私が日文研に着いたのは二〇一四年一二月三〇日で、二〇一五年一二月三〇日にアメリカに帰国、まる一年間、滞在した。京都滞在中は毎日のように、妻と一緒に坂の下のスーパー、イズミヤへ買い物に行き、日文研への坂を登って帰り、四季を通して移りゆく自然を観ながらの登り下りを楽しんだ。はじめのうちは随分、妻にぶつぶつと不平を言っていたのだが。中古の自転車を買い、運動しがてら猿や鹿、鳥類保護地区など、日文研周辺の自然を観察するようになった。かなり人口密度の高い京都にこのような自然が残っていることに驚いた。

初めて日文研を見たのは二〇年以上前で、故ウィリアム・タイラー先生を訪ねた時であった。その当時、家はあまりなく、バスもまれであった。現在は、高級住宅地になっていて驚いた。四〇年前に一年間ほど京都の靴屋で働いたことがある。給料は非常に安かったが、毎週のように京都見物をしていた。七〇年代には外国人は殆ど見かけなかった。街並みは貧しく、寺には自由に入れた。最近では中国、欧州、インド、各国の観光客が街にあふれ、市中は昔と比べられないほど繁栄している。しかし、私の若いころの京都をやはりなつかしく思う。

さて、私は、日本現代文学を専門としてやってきたが、かなり以前から地方文学に興味を持ち、明治三〇年代の地方色論争から始めて、地方としての異郷または理想郷、純粋日本を保存する空間、郷愁としての対象等、現代日本文学及びその批評における田舎は、繰り返し、繰り

返し、現れ、主張され、論じられて来たので、その重要性を此処で指摘する必要はないと思うが、地方文化を定義するのは、〈中央／地方〉のパラダイムによるものである。即ち、統一した巨大な組織は複数の未分化の地方を全体的に定める。私の以前の研究によると、このパラダイムに従うとある地方の特徴性を蔽い隠す。地方に於いては典型的な文学活動はあり得ないし、その地方々々によって変わってくるだろう。このために、一つの地方、その地方の観点からある文化史を書こうと思いついたが、これは思ったより難儀なプロジェクトになっている。

様々な理由で、出雲の国という地方を選んだ。この長年にわたる研究を行うには、ある地方にコミットメントが必要と思う。東京、京都、大阪より私の出雲地方との関係はずっと長く深いものである。妻とそこで会い、子供はそこで生まれた。おそらく私の「日本」との経験は「出雲」との経験である。また、本格的な昔風の地方文化史を書くのには、起源から始めなければならない。出雲の考古学的な研究は特に豊富である。八世紀に完成した『出雲国風土記』には出雲の自然と名産物、交通線と国内の郡、神と神社などが描写されており、古代の出雲を知る上で貴重な史料である。『出雲国風土記』の記録によると、宗教的な意味でも出雲は独特な存在である。『出雲国風土記』、「出雲国造神賀詞」「出雲国計会帳」「出雲国大税賑給歴名帳」など―瀧音能之の言葉を借りれば、「出雲には、他の地域と比較する驚くほど豊富な古代史料が残されている。これも出雲地域の特殊性といっても良いであろう。」鎌倉時代にも、出雲の国の特殊な存在は続いた。結局、出雲の人々にとって出雲地方は中央であり、その観点から見るのが、このプロジェクトの本心である。

いうまでもなく、この研究は日本と出雲で行わなければならない。日文研はこの研究を可能にしてくれた。鈴木貞美先生の紹介で、ジョン・ブリーン先生の招待をいただいた。これまで

の私の専門は現代日本文学であり、古代研究では経験不足の私が、二人の先生の支持を得たことに、感動した。日文研で受けた待遇は素晴らしかった。宿泊施設は申し分なく、施設のインターネット・アクセスは良かった。Nichibunken Evening Seminar、「失われた20年の日本研究のこれから」のようなシンポジウム、その他の講演と共同研究の会合と発表は非常に面白く、最近の日本に関する一流前進的な研究を知らされた。又、同僚の外国人研究員との交際は楽しく、友情にあふれるものであった。

日文研のスタッフは皆親切で精通しておられるが、特にお世話になったのは、図書館の人々であった。日文研の図書館のコレクションは、アメリカでは手に入らない出雲に関する資料が多く、本当に役に立った。スタッフは図書館にない本や雑誌記事を快く注文して下さったり、外の大学から借りたりもしていただいた。彼らには心から感謝している。

出雲の国は歴史的概念であり、地方行政の観点からは存在しない。しかし、現在の地図に載っていない出雲は根深くかつ具体的なイデアであり、島根県に住んでいる約六八九、九六三人なら誰でもその境を知っている。島根県内の石見の国との境は三瓶山あたり、広島県と鳥取県の境は中国山脈の日本海側の分水嶺に大体はまり、北東から南西の日本海に面した海岸は約三百㎞。この想像上の国を探検するため、現地調査を行わなければならない。この点にも、日文研の管理者と先生たちの許可を得て、毎月一週間から一〇日間ほど、出雲地方を訪れた。出雲地形を踏査し、出雲だけで得られる資料を集めた。これも、日文研が可能にしてくれた。

要約して言えば、私の思い出では、国際日本文化研究センターは、日本研究のための理想的な環境であった。

（米国オハイオ州立大学教授）